

第Ⅲ部 第1章

日本における自然景観の歴史の変遷

溝口 正人

はじめに

文明は発生以来、自然環境の破壊や改変によって成立してきたとい
ってよい。しかし近年においては、生態学的な社会の把握のもと、産
業革命以来の社会の進展に対する見直しが顕在化してきている。近代
の産業中心主義的な指向性が、ともすれば環境破壊を生み出し、人類
そのものの生存を脅かしかねない状態に至っている点が共通認識とな
りつつある。サステナビリティといった概念の導入も、そのような
認識によるものであろう。

建築学会の機関誌『建築雑誌』の1996年12月号では「環境デザイン
学を目指して／環境工学の展開」というタイトルの特集を組んでい
る。その趣旨説明では、このような世をあげての「環境」ばやりに対
して「エセ環境共生建築が氾濫しかねない」と危惧する。エコロジー
が蔓延し、「環境に優しい」ことが最優先されるかのような風潮、あ
るいは「健全な」発展のためにサステナビリティという語が氾濫す
る現状に戸惑いを覚えるのは、筆者だけではないようである。

本稿では、今から4000年以上昔となる縄文時代から今日にいたる事
象のうち、都市あるいは集落の生成過程において、実際に目に見える

山や川の姿が、どのような歴史的あるいは社会的な背景で形成されるにいたったかといった点に問題を絞り、人間社会と自然との関わりについて示唆に富む事例をトピック的に取りあげる。そしてそれらの事例を見通しつつ、自然景観とは何かについて考えてみたい。結果として、都市化が進展する現代社会において、自然あるいは自然景観をどのように理解すべきかについての手がかりを得ることもできるのではないかと考えるのである。

もちろん人工と対置されるような自然、あるいは景観という語自体が、ある種の世界観を伴っているものであり、まさに近代的ともいえる。よってその概念と成立を問うこと自体にも大きな意味があり、本来は多くの議論が必要となるであろう。しかしながら、ここでは自然あるいは景観という語については、あまり細かい定義はせずに話を始めることとしたい。

1 建築家・安藤忠雄と宇宙飛行士・毛利衛の議論

先年 NHK の教育テレビで、今日の日本を代表する建築家である安藤忠雄氏と、さまざまな分野の著名人との対談番組が放映された。多くはありきたりの議論に終始していたが、宇宙飛行士の毛利衛氏との対談のみは、これからの環境のあり方、「人間の生活環境と自然との関わり方はどうあるべきか」という、本論の主題に関係するものとして興味深いものであった。

二人の議論は、結局平行線で終わったが、その過程で浮かび上がった二人の自然や環境に対するイメージと視点の相違が、この種の議論における問題点をはらんでいて注目されたのである。

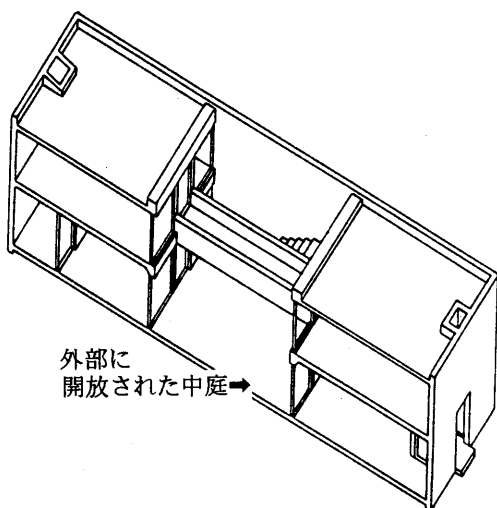


図-1 住吉の長屋 アクソメ

(1) 安藤忠雄のめざすもの

安藤忠雄について簡単に触れておこう。国内外で多くのビッグプロジェクトを手がけ世界的に活躍する、今日の日本を代表する建築家である。安藤は1976年に完成した「住吉の長屋」で当時の建築界にセンセーションを巻き起こし、華々しく建築界にデビューした。

大阪の市街地に建つこの「住吉の長屋」で特に注目される点のひとつが、雨の日は傘をさしながらいろんな部屋に行かなければならないその空間構成である(図-1)。この作品は、彼の建築観とその後の方向性の原点となった。そして安藤が対談で力説した、人間と自然との関わり方に対する考えが、この作品に集約されている。

近代建築がめざした生活環境は、普遍的な快適性の追求にあった。それは多くの場合、自然環境から切り離されることで獲得される。そのために近代建築は、室内空間を外界とは切り離し自在に制御するこ

とで、快適な空間の実現をめざしたのであった。

現代の住まいは、自然から隔離された中で居住環境をつくっている。このような、周囲の自然と関係を持つことなく人工的にコントロールされ管理された中で生活するという自然と人間のあり方に安藤は疑問を呈する。「住吉の長屋」では、中庭に外界を取り込み自然を感じさせることで、人間を自然とは無関係ではいられない状況に置き、自然の存在を体感させているのだという。

表現を変えれば、安藤は、身体感覚に根ざした自然との接し方を主張しているともいえるだろう。光、雨、池、海と自然を感じる対象はさまざまであるが、このような考えを、近年手がけた大規模プロジェクトにも展開している。

（２）毛利衛の考え

毛利衛は、このような安藤の考え方に対して最後まで承伏しなかった。宇宙にいる彼の眼前に、青い地球がある。陸地の多くは緑地であり、あるいは砂漠も存在するが、人間が生活している場所、特に都市域は、変色して自然を蚕食している状況として目にすることができる。人間の営みにより、地球的規模でこのような自然の蚕食が展開されているのが実態なのである。自然との関わりを持つべきであるとして、都市レベルあるいは建築レベルで自然をシェアしていくことがよいことなのかは疑問だという。

普遍的な生活環境の快適性の追求は、近代の指向性として無視できない。しかし今後、頭脳労働に人間の生産活動の主流が移っていく以上、生活環境は都市に集約されるべきであり、その場合、人間はより快適な環境を求めて人工的な環境をつくって住めばよい。生活環境を集約することにより自然を多く残した方が、地球規模ではよいのであ

り、自然を享受したい人間は、集約の結果として保持された自然を、自らが出かけて行って享受すればよいと主張する。

(3) 議論の行方

私には、以上の議論で両者の視点の相違が浮き彫りとなっているように感じられた。安藤の場合、自分の設計した建築を中心に周辺をみる。自己の周囲をとりまく自然を如何に享受するかに終始する。またその視野はきわめて視覚的であり、地上レベルからに限定されている点も指摘できる。まさに天動説的な視点あるいは世界観である。

毛利はやはり地球を俯瞰して自然を理解しようとする。人間をあくまでも自然の中の一要素として定位する。そして自然を享受するには、目的とする場所へ出かけていけばいいのだという。地動説的な視点あるいは世界観ともいえるだろう。

いいかえれば、両者の相違は自然に対する姿勢の相違である。安藤は自然を、水・光といった断片の集積としてとらえ、受動的な印象や記憶で語られるものとしているのに対し、毛利は自然は総体であり、その獲得には行動を伴うのだとする。さらにいえば、優先すべき点を感性におくか理性におくかという点にまで論は及ぶだろう。

そして議論の過程において、毛利の意見に反論する世界観を、安藤が提示できなかった点は印象的であった。身体感覚に基づく自然の享受はある種のエゴであるともいえ、このようなエゴの集積が、どのような結果をもたらすかは明白であろう。

少なくとも、宇宙からの映像として我々が目にする状況が地球に生じているのだと認識すれば、安藤の主張は、毛利ならずとも疑問視せざるを得ない。地球規模で自然のパイが決まっているときに、とても今日の人口規模では、自然を感じるための個のエゴの積み重ねの果て

には、むしろ享受すべき自然の破壊が進んで逆の結果をもたらす。

さらに印象的であった点は、議論が平行線を辿ったとはいえ「自然は、ある種、不変な存在である」という2人の共通理解があると感じられたことにある。

もちろん都市と自然は二項対立的に捉えられるものではないし、単純な包含関係でもない。より複雑な空間構造を持っていることは特筆すべきことではない。現実には、都市と農村あるいは田園地帯、両者の境界さえも明確ではない。またビルの集積する業務地域から住宅地域、工場地帯と都市の実態もさまざまであろう。そもそも冒頭で述べたように、何を自然とするのかも難しい。

ただしそのような渾然となった状況を認めるならば、近代以降の社会において、都市と自然はある種のイメージで語られ得るものであるとする考えは、多くの理解を得るのではないかと思う。であるからこそ二人の議論も、そのような共通理解のもとに始まっている。

しかしながら私は、目に見えるような自然を景観レベルでみた場合、その実態は普遍的なものか？またどのようなレベルで普遍的なのかという点は、改めて確認しておく必要があるのではないかと感じている。

2 人間の活動と自然景観

(1) 食生活が景観を変える

例えば小椋純一氏の詳細な研究(小椋 1992)により指摘された近世から近代にかけての京都近郊における孟宗竹林の変遷は、そのような疑問を生じさせるに十分な手がかりを与えてくれる。

今日、京都の西山、桂から大山崎にかけては、非常に見事な竹林が

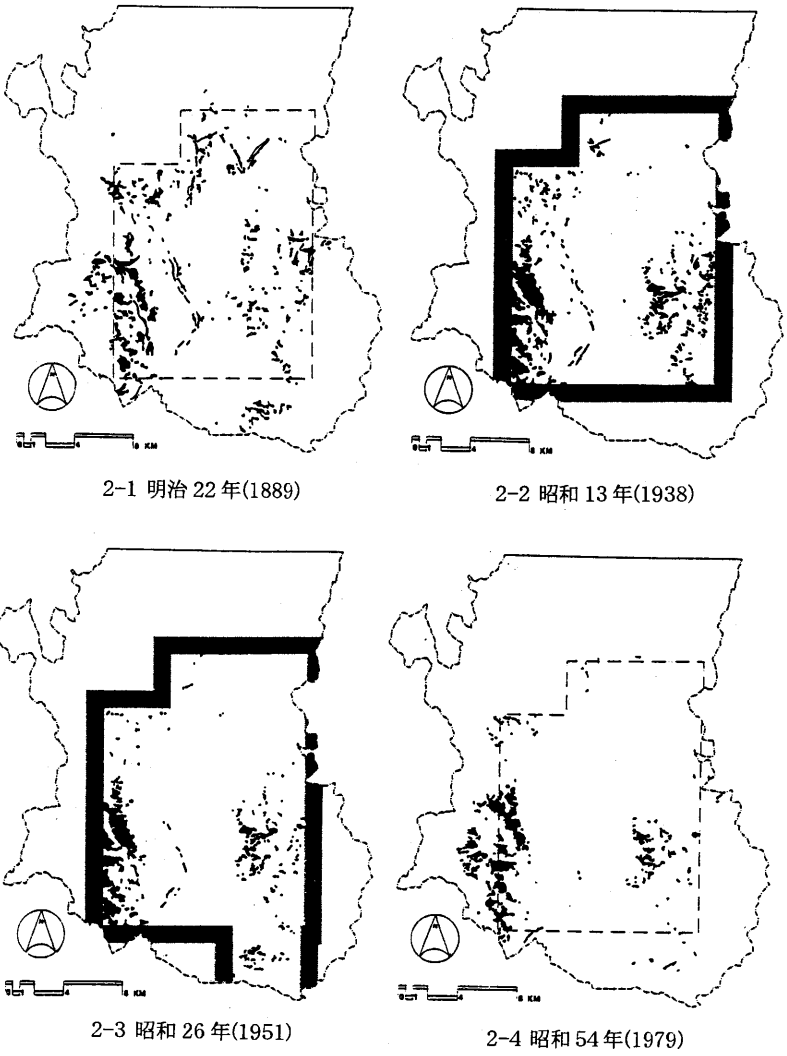


図 - 2 京都近郊の竹林の分布

山腹を被い、独自の山並み景観を形成している。この西山を産地とし春先に食卓にのぼるタケノコは、京都の春の到来を示す風物詩であり、また車窓から目にする新緑の竹林は、春の西山の景観を特徴づけるもののひとつであろう。

小椋によれば、今日の日本各所で目にすることができる孟宗竹は、江戸時代の後半に中国から輸入された。当初はお茶などの花器の用材として、やがてタケノコを食用にするために栽培される。19世紀の初めには食用の習慣が確認されるという。つまり孟宗竹の竹林景観は、この200年ほどで形成されたことになる。

また小椋の研究が興味深いのは、今日の状況が、歴史的には単純な拡大傾向のもとで形成されたものではない点を指摘している点である。小椋の指摘は以下の通りである。

江戸時代からのタケノコの消費の増大に伴い、増産のために京都近郊では山腹のみならず、畑地までが竹林化される。しかし供給が需用を上回るに及んで価格が暴落する。その結果、明治の半ばには、それまで竹林化されていた土地が再び畑などに転用された（図2 - 1）。

ところが近代になると新たな状況が展開する。交通インフラが整備され、京都近郊だけでなく近県へのタケノコの販路が確立されると再び竹林が増え始める。やがて都市化に伴って、市街地に近い地域に点在していた竹藪は宅地化され消滅し始める（図2 - 2～4）。このような傾向は周辺にまで広がり今日に至っている。多くの地域は、畑から竹林へ、そして再び畑へ、あるいは宅地へと転変して今日に至ったのである。

以上の事実は、タケノコの食用としての需用の高まり、あるいは生産過剰による価格暴落、新たな市場開拓といった食習慣や経済の変化にリンクする形で、竹林の存在で形成される緑地景観が、わずか200

年ほどの間で大きく変貌してきたことを示している。私たちが見慣れている、普遍的な自然と感じるような景観は、実はある種の社会との相関の中で形成され、かくも短期間に変化する。

では、社会の変化と自然景観はどのように関係してきたか。もう少し歴史的に遡及して、日本の自然景観の形成過程と社会的な背景との関係について、歴史時代以前からの長期的なスパンで、生産活動的な視点から事例の検討をしていくこととしよう。

(2) 狩猟採集

考古学における科学分析の導入は、近年めざましい成果をあげている。出土品と遺構を中心としたモノの復元に止まらず、花粉や昆虫などさまざまな動植物遺体や土壌分析による植生の復元が可能となってきた。そして植生や景観を含めた環境論にまで考察は進んでいる。

そのような考古学的成果をもとに、東日本における縄文時代から弥生時代にかけての集落周辺の植生の変化と生活との関係を論じた山田昌久氏の論文がある（山田 1996）。同氏の論文をもとに、狩猟採集社会である東日本の縄文から弥生に至る集落景観の変化をみていくこととしよう。

東日本の縄文集落の周辺の花粉や遺体の分析によれば、6000年前における集落周辺の森林の状況は、気候区分で理解される状態で保たれていた。それが4000年以前ぐらいになると、クリ林の存在が非常に顕著になるという。

ところが2000年以前になると、東日本の縄文集落周辺の植生に変化が生じる。集落内、あるいは集落に近いところで食用としてのトチの増加が確認され、もう少し離れた周辺になると、従来通りのクリ材が確認される。つまり、生活上のいくつかの用途に合わせて、植物の「生

産物としての種分け」が始まったことが指摘できるという。

そして弥生時代となる2000年前以降、東日本では植生が主にクヌギ林に変わっていく。農具や建築材としての利用において、クヌギはクリより卓越している点が、植生の変化の理由と考えられるようである。同時代に、西日本ではカシ材、カシ林に利用材と植生の主力が移っていくという。

また佐藤洋一郎氏によれば（佐藤 1997）、遺跡の壮大さと遺物の豊富さ、多様さで、従来の縄文時代のイメージを書き換えたといってもよい青森の三内丸山遺跡では、採取されたクリのDNA鑑定からみて、集落周囲のクリ林は、「栽培」に近い形で選択的に形成されてきたとみなされるという。三内丸山遺跡の集落人口の維持は、まさに集落周辺に選択的にクリ林を保持して、それを資源として活用した結果なのだとみることができる。

これらの考古学的成果からみれば、従来単純な自然狩猟採集生活を営んでいるというイメージで語られてきた縄文時代でも、選択的な植生コントロールの結果、集落周辺の自然景観が人為的に形成され、時代とともに変化していたのである。人間は自然に積極的に関与することで、環境を改変していたのだといえる。

（3）農耕

農耕の開始とともに自然が激変するという事実は、歴史学的あるいは民族学的に従来から指摘されている。わが国における弥生時代の農耕社会の到来が、どのような景観的变化をもたらしたのかについて、縄文時代から古墳時代にかけての開発と植生との関係を論じた辻誠一郎氏の論文（辻 1996）を中心にみてみよう。

1980年代以降における発掘成果によれば、縄文時代における低地や

谷地の植生は今日イメージするような草木の繁る湿原ではなく、ハンノキやスギなど多様な樹種からなる森林地であったという実態が、日本の広い地域において確認されつつあるという。つまり山地のみならず湿地にいたるまでの豊富な森林が、依然として縄文時代の環境の主体であったわけである。

埼玉県の赤山陣屋跡遺跡では、縄文時代後期から晩期にかけての木材などが入った泥炭層の上に、草や泥が混ざっただけの弥生時代の土層が明瞭な相違を示して堆積する状態が確認される。この地層の変化は、弥生時代における農耕地の開発に伴って、それまでの森林が激減した事実を示しているという。

また福井県三方地方では、そのような破壊の実態を示す直接的な遺構として、斧によって伐採され掘り上げられた縄文時代後半の森林の立ち株群が検出されている。低地帯における広大な森林が、道具の開発を背景とした破壊的な開発により消滅したのである。

近年、さまざまな文明の消長を、森林破壊に起因するとした考えも提唱されている。日本に話を限定したとしても、農耕の開始により自然景観が激変した点は明確に推測しうるだろう。弥生時代中期の大規模環濠集落として知られ、人口およそ1000人を擁していたと推測される愛知県朝日遺跡での昆虫遺体の分析では、植生に依存する昆虫が認められない点から集落周辺は森林が伐採された裸地であったと推測されており、環濠からは水質の汚濁を示す藻や寄生虫卵が検出されている（森 1994）。農地開発による森林破壊、そして集住による集落周辺の環境汚染が、農耕によりもたらされたのである。

（4）燃料需要

古墳時代に入ると、窯業や製鉄といった目的での大規模な燃料需用

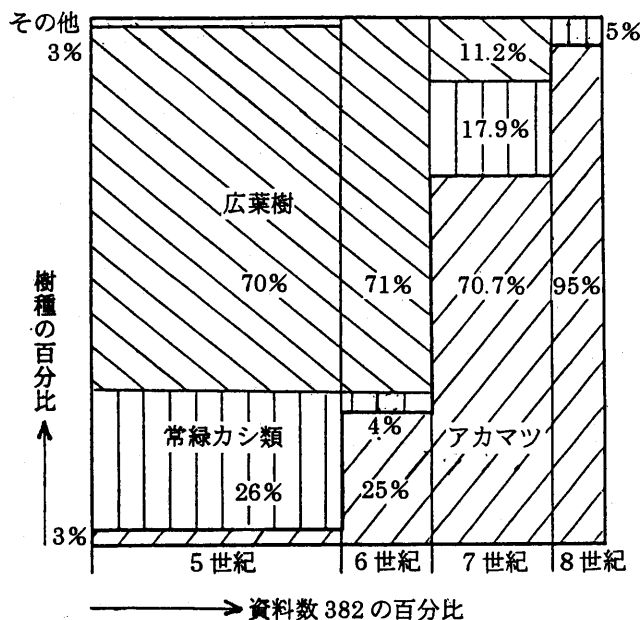


図 - 3 須恵器窯出土の木炭分析による樹種

が生じることになる。そして今日のエネルギー消費型社会につながるような、「燃料」としての木材を大量消費していく時代が到来する。置田雅昭氏の論文をもとに（置田 1996）、そのような燃料需用による集落周辺の植生と景観の変化をみてみよう。

古墳時代の陶器の一種、須恵器（すえき）の窯跡から検出される焼成時の灰を分析すると、燃料とされた樹種が判明するという。西田正規氏の分析結果によれば（図 - 3）、5世紀から8世紀へと時代が進むにつれて、燃料となる樹種が大きく変化しているという。5世紀から6世紀にかけては常緑のカシなど、いわゆる照葉樹林といわれている樹木や広葉樹が用いられていたが、6～7世紀にはマツの占める割合が著しく増加し、8世紀には大部分がマツになる。

つまり需用の急増による陶器や埴輪の大量生産に伴って、陶窯周辺の植生と自然景観が激変していったことを、このデータは間接的に示している。同様なことは高槻市の新池遺跡の花粉分析でも証明されるという。古墳時代の窯周辺の植生景観は、当初シイやカシであったものが、いったんこれらの樹種が刈り取られてシダの原野になる。その後にコナラやアカガシの二次生成林が形成され、やがてはアカマツの林に変わる。

つまり、弥生時代の農地開発では対象とならなかった山地や丘陵地も、古墳時代以降は植生的、景観的に激変していったのである。今日、大阪を過ぎて広島に至る中国山地を新幹線の車窓から見ていると、岩肌が出た山々にマツが茂っている状況を目にする。このような景観は、すべて人間の生産活動の結果ということになる。

前出辻論文は、歴史時代において今日の都市近郊でもみるようないわゆる里山、雑木林の景観が成立したのであり、近代に至るまでそのような自然景観が続いていると指摘する（辻 1996）。現代におけるアカマツ林の全国的な分布をみると、古墳時代以降の開発、人口集中域とその分布は、一致する部分が多い（図 - 4）。少なくとも植生把握から国土レベルでの自然景観を捉えた場合、古墳時代は、辻論文が指摘するようなひとつの画期であったといえる。

しかし土地のやせた他の樹種の立地し得ぬところに生長するアカマツは、燃料としては適切な木材であるが本来の植生ではないのであり、アカマツの生長する林地は荒廃傾向にあるとはいえ、裸地化した完全な荒廃地には至らない極めて不安定な様相であるという（千葉 1991）。つまり今日みるアカマツ林は、直接的であれ間接的であれ極めて人為的な保全活動の結果でもあったわけである。この点は後に述べることとしよう。

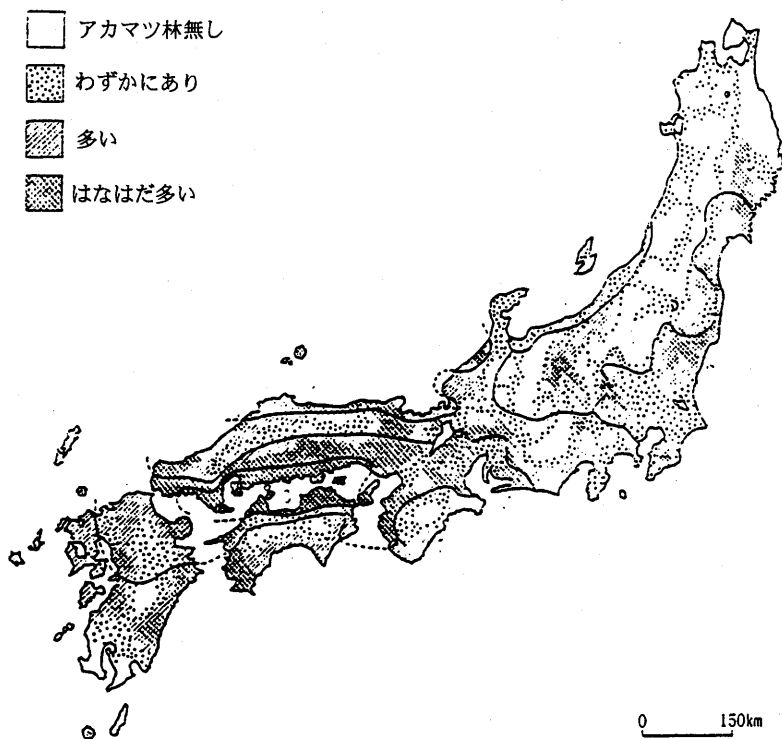


図-4 アカマツ林の分布

(5) 建設事業

もう一つ、古墳時代以降の事例として建設事業をあげておこう。今日みる古墳の巨大さをみれば、古墳時代以降の土木造営事業が自然景觀にもたらした影響の甚大さが理解される。その具体相として歴史時代における建築造営をみてみよう。

先日世界遺産として登録された奈良の平城宮跡では計画的な発掘が進められ、古代都城のスケールを実感することができる。広大な都城の建設は、今日とは比較にならない小規模であった古代国家における

一大国家事業であった。

藤原京や東大寺の造営における材木(ヒノキ)の調達先については、万葉集や正倉院文書といった文献により、滋賀県の信楽の田上山であることが判明する(上原 1996)。今日信楽周辺を車で走ると、背の低いマツなどが茂り岩肌が出たハゲ山的な状況も存在しており、かつてヒノキの大木が切り出されていたとは到底想像できない。しかし史料によれば、この山々にヒノキの森林が存在していたことになる。

田上山は、建築造営の現場となった飛鳥からは遠く離れている。よって藤原京の人々は、眼前の建築造営による田上山の森林の変貌を知る由もなかったであろう。しかし現実には、信楽の山々は荒廃した。ある都市の活動に伴って、結果的に思いもよらない地域の景観を一変させていくのである。

大規模な寺院である東大寺の場合、より広範囲の地域が造営に関与することとなる。東大寺は源平の争乱により焼亡するが、鎌倉時代の再建部材の調達は、山口県や岡山県にまで及んでいる。そして江戸時代に再建された東大寺の大仏殿は、造営費用削減のために平面規模を縮小したものの、大仏上部の一番大きな梁材は遠く南九州の霧島から運ばれている(西 1980)。

地方単位で建築活動がなされていた時代においては、資材の調達も周辺の森林の木材伐採に止まっていたであろう。ただしその場合も、すでに周辺の自然に関与する中で造営活動は成立していた。そして前述した朝日遺跡の例が示すように、周辺環境の改変は著しくなっていたのだろう。しかし国家が整備されて、造営事業も国家的規模になると、事業に関与する範囲が大きく広がってくる。

世界遺産にも登録された合掌造で知られる岐阜県の白川村は、人里はなれた辺境の地だという認識がある。しかし一方で、そのような山

奥でさえ現実には幕府の体制に組み込まれるのだから、すでに江戸時代には日本に辺境などは存在しないと小寺武久氏は説く(小寺 1994)。江戸時代に至っては、東北から九州に至るまでの国土に人間が関与することになった。造営活動を通して、日本国土全体が社会化され社会システムの中に組み込まれていく過程がうかがえるのである。

そして今日では、日本の建築造営に伴い、熱帯雨林の破壊が引き起こされている。白鳳の伽藍再現をめざす奈良薬師寺の堂舎の復原には台湾のヒノキが用いられた。また北米や東南アジアからの木材の輸入なしに、今日の住宅建設はあり得ないだろう。自然の社会化、その結果としての景観の改変は世界規模になっている。

3 里山景観の行く末

(1) 中近世京都の景観

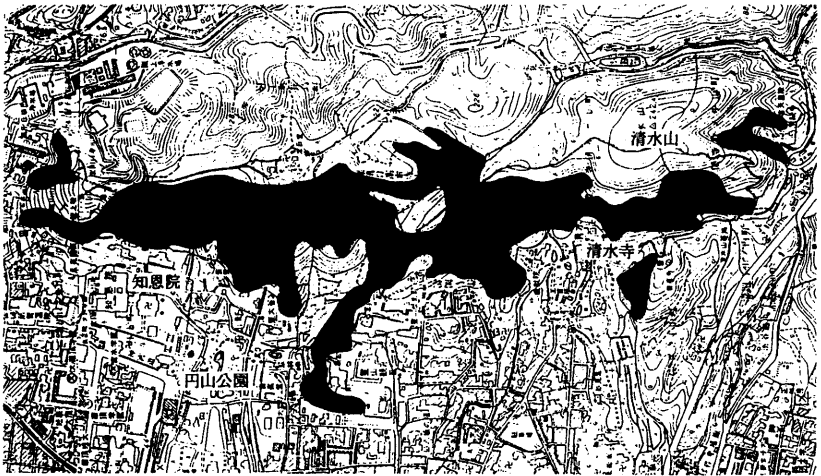
中世から近世にかけての絵巻や屏風絵をみると、在郷町や宿場町あるいは城下町など、性格はさまざまであるが、都市の周辺は、かなり類型化されて描かれている。都市の周辺にはマツと竹藪あるいは雑木林が町を取り囲むように生え、また街道沿いにはマツが生えるといった形式で描かれている場合が多いのである。これは絵画の類型化と考えることもできる。しかし歴史的町並みの調査を通した実感として、私はこのような景観が絵空事ではなかっただろうと考えている。

16世紀前半の京都の景観を描く「町田本洛中洛外図」には、京都近郊の山の情景の一部として落ち葉を掻く人々が描かれている。近世以前では、京都近郊の山は多くが寺社の管理のものに置かれ、地元の住民が燃料や農業用の肥料に使うための松葉や落ち葉を拾いに入山していたのである(小椋 1992)。



(黒い部分は国有林内のシイ林, 斑状の部分は推測した国有林外のシイ林)

昭和初期



昭和 54 年(1979)

図 - 5 京都東山中央部におけるシイ林の変化

前述したように、マツ林は植生的には必ずしも安定したものではない。近世以前の京都周辺の山々は、この落ち葉掻きのような人為活動の結果として、ある一定の状態を保っていた。京都周辺の自然景観は、持続的な人間の関与により形成されていたのである。そしてそれは何も京都に限ったことではなかった。

であるから、近代に入って寺社地が官有地に切り替わった瞬間に状況は一変する。落ち葉掻きなど近世以前のような入山が規制されると、植生とその結果としての山並み景観は急速に変化することとなった。図5は小椋氏が示した東山中央部における植生の変化である（小椋 1992）。昭和初期からわずか50年程の間に激変していることが理解できよう。西日本は基本的に照葉樹林帯に属するから、人が関与しなくなると急速に元の植生に還っていく。それまでの疎なマツ林の状態から一転して照葉樹林にとって換わるわけである。

小椋氏によれば、もとは遊興地として桜や楓などを選択的に植えていた京都の嵐山においても、同様に植生が大きく変化しているのだという。植生への人間の関与の変化が、わずかな時間でいかに都市周辺の景観を変えてしまうかを、これらの事例は物語っている。

（2）近代における大都市近郊の里山

環境保全を目的として放置した前項の事例とは対照的な場合、人間の関与が植生を維持する限界を越えた事例をみてみよう。

図6は、名古屋東部の丘陵地である八事を描いたもので、図6-1は江戸時代後半となる天保15年頃（1844）、図6-2は明治23年頃の状態を描いたものである。図6-1では山肌が見えつつ、そこにマツが疎らに生えている状況がみてとれる。前述「町田本洛中洛外図」の描写と共通するこの姿が、近世都市近郊にみられた里山の景観といえ



図 - 6 - 1 天保15年頃の八事(『日本名所風俗図会 六』より)



図 - 6 - 2 明治23年頃の八事(『尾張名所図会』より)

る。ところが図6 - 2では、ことごとくハゲ山になった状態が描かれている。

山林を保持していた社会システムが幕藩体制の終焉とともに崩壊する。一方で幕末から明治にかけての生産活動の活発化と呼応して森林の伐採が無秩序な形で進んでいった。その結果がこの図6 - 2にみる状況なのだという（堀田 1995）。

小椋氏によれば、神戸でも同様な事実が指摘できるという。このような状況は、前述の京都や名古屋をはじめ、多くの都市でみられたのである。今われわれが目にしていく状況は、必ずしも不変なものではない。国土レベルで自然の社会化がなされた今日、すでに社会システムに組み込まれた都市近郊の自然景観は、保護のために放置しても変化をとげるであろうし、従前のおおきく関与を続けても、そのバランスが崩れれば一気に荒廃することになる。それは里山というノスタルジックな言葉とは裏腹に、かくも人為的な存在なのである。

4 自然景観の歴史的位置づけ

春田尚徳氏が明快に指摘したように（春田 1995）、日本では情報産業やサービス産業といった三次産業の社会における比重が増して都心部へ業務が集中していく一方で、都市化が全国的に広がっていく状況がある。そして遅い速いはあれ、世界的に同じような状況が展開している。遠く地球の果てと視野の外に置いてきた自然領域も、今後より一層社会に組み込まれざるを得ない。

中国の雲南省西北部、電気も水もなく漢族さえもあまり来ないような山奥の集落調査に参加した時である（浅川滋男 1996）。彼らが神の山と崇める山でさえ、近づいて注意深くみると、多くの切り株が残さ

れていた。神の山も、伐採後の樹木で再び景観が形成されている。中国奥地の緑の山々でさえ、ある一定の割合で抜採された後に選択的につくられた人間が関与した景観なのである。

このように、実態は地球の隅々にまで、何らかの人類の関与が広がっている状況なのであり、その一断面が今日目にする自然景観であるといえるのではないか。では都市化が進展するとどうなるか。風景式庭園発祥の地であり、ガーデニングのメッカとなっているイギリスが、実は都市化が全国土レベルでいち早く進んだ国であり、そこでは自然さえもが景観形成の道具だてとして利用され、人為的に整備されている（ジェリコー 1980）。近代都市社会の帰結を、イギリスの実態から読みとることができるだろう。

イギリスと日本とは、気候的、地勢的に大きな相違はある。また風景の創出、造景行為に対する歴史的な相違もあろう。しかし前述の諸例でみてきたように、実は日本の自然景観の多くが、人が関与し成立しているという部分ではイギリスと変わらないのではないか。そういった認識のもとで、自然保護や自然景観の保全という問題も考えてみる必要があるだろう。

歴史時代に入ってから身近なタイムスパンでみても、都市周辺の自然景観の変化は大きい。そうすると、冒頭で述べたように、自然は守っていかなければいけないという議論はどこまで有効なのかが疑問としてわきあがる。現在の状態を保存するとして手を触れないことが、またある別の状況を引き起こす。つまり保存を目的として放置することも、現状からのある種の変更を伴う。守るべき自然とはどのようなものなのかを注意深く考える必要がある。そして映画「ブレードランナー」が提示した終末感ただよう都市像が望むべきものでないのだとしたら、私は毛利衛の示した都市と自然に対するスタンスに共感

を覚えざるをえないのである。

今日、少なくとも生物的な観点からみた場合、持続可能な個体数をおそらく人類は超えているとみてよい。しかしそれでも、ある種の自然への関与のなかで人間は生息していかなければならない。それは共生ということばで切り抜けられるような単純な話ではないだろう。

21世紀を切り開くには、やさしい感性よりは、むしろ骨太な理性が必要とされるのではないだろうか。

【参考文献】

- 小椋1992：小椋純一『絵図から読み解く 人と景観の歴史』1992
- 山田1996：山田昌久「時間知変化・多工程技術・空間知変化一定住人類の資源関与に関して」季刊考古学55号、1996. 5
- 佐藤1997：佐藤洋一郎「三内丸山遺跡のクリ園と縄文農耕」アサヒグラフ 3928号、1997. 8
- 辻1996：辻誠一郎「開発と植生の変化」『考古学による日本歴史 16』1996
- 森1994：森勇一「生物群集からみた朝日遺跡の変遷—都市型生物群集の出現から消滅まで—」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第34集）朝日遺跡Ⅴ（土器編・総括編）』1994
- 置田1996：置田雅昭「大和政権下の自然と人間」『考古学による日本歴史 16』1996
- 千葉1991：千葉徳爾『増補改訂 はげ山の研究』1991（初版1956）
- 上原1996：上原真人「造管用材の調達」田中琢編『古都発掘』1996
- 西1980：西和夫『工匠たちの知恵と工夫』1980
- 小寺1994：小寺武久他『白川郷文化フォーラム92 合掌造り』p87、白川村・白川村教育委員会
- 堀田1995：堀田典裕「八事丘陵地における住宅地の形成過程とその空間的特質」日本建築学会計画系論文集471号、1995. 5

春田1995：春田尚徳『日本の都市化と社会変動』1995

浅川滋男1996：浅川滋男編『雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術
に関する調査と研究』住宅総合研究財団1996

ジェリコー1980：ジェフリ&スーザン・ジェリコー（山田学訳）『図説景観
の世界』1980（原著1975）

【図版出典】

図1：ja1991. 1月号に加筆

図2：小椋1992

図3：置田1996をリライト

図4：千葉1991を一部編集

図5：小椋1992

図6：堀田1995